

調査報告

神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第5次調査報告(2003年度)

鈴木由貴子 半田 素子 石井 寛子

早勢 加菜 小泉 玲子

はじめに

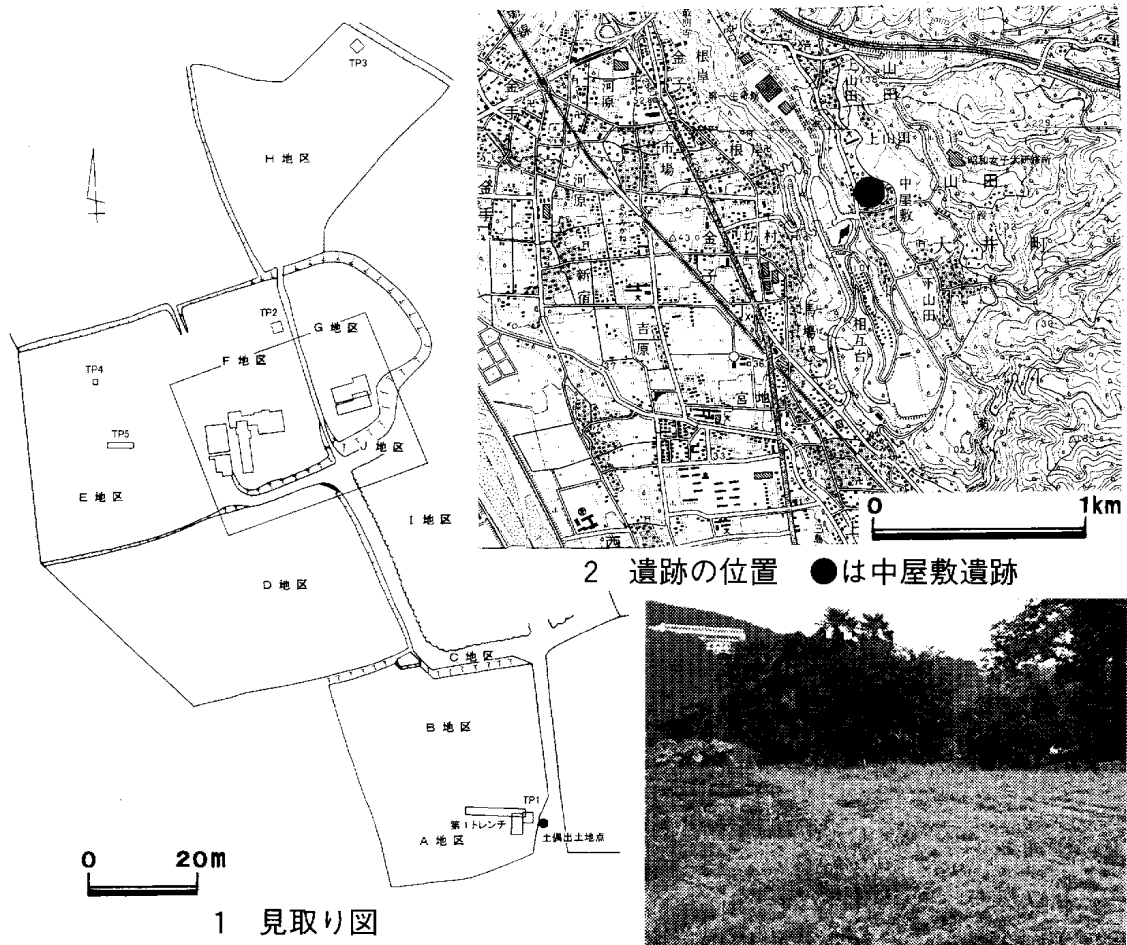
本概報は、2003年度に実施した中屋敷遺跡第5次調査の記録である。中屋敷遺跡は、神奈川県足柄上郡大井町に存在する遺跡で、1934年に土偶形容器が発見されたことで注目された遺跡である。昭和女子大学では、1999年に実施した第1次調査以来、継続調査を実施してきた。第5次調査は過去の調査成果を元に計画実施している。以下、調査の目的と経過、層序、調査区、出土遺物、成果と今後の課題について報告する。

調査は中屋敷遺跡調査団ⁱを組織して実施し、本概報は、鈴木、半田、石井、早勢、小泉で分担した。担当部分については各項目末に記した。調査は歴史文化学科の事業として取り組み、同時に私学助成財団より「特色ある教育研究の推進」事業の採択を受けて実施している。

1 調査の目的と経緯(図1)

本遺跡の調査では、第2次～4次調査ⁱⁱにおいて、F・G地区で計4基の土坑を検出している。土坑出土の土器は弥生時代前期～中期に属するものと考えられ、土坑の平面形、規模など共通する点が少なくない。このことは、近接した時期にこれらの土坑が存在していた可能性を示唆し、単独で存在した土坑が偶然発見されたのではなく本来何らかの関係を持っていた可能性を推定させた。そこで、第5次調査は、これらの土坑の分布、詳細な年代や性格を明らかにすることを目的とし、F・G地区に限定して調査を実施することとした。F・G地区は調査地中の微高地平坦面南端にあたり標高は約97mである。土偶形容器が発見された地点との比高差は約8mとなる。過去の調査からF・G地区の土層は宝永年間に堆積した火山灰の2次堆積層(以下2層)下の削平が著しく、目的とした土坑は2層下にわずかに残る3・4層が掘り込み面であることを確認している。しかし、全体に3・4層の存在が希薄であることから、最終的には縄文時代の堆積層である5層上面までの掘り下げを目標とし、遺構の有無を確認することを調査方針とした。

G地区は、第4次調査の第3トレンチ(以下3トレ)北壁近くで12・13号土坑を検出したが、13号土坑は調査区外に存在した一部が未調査であった。従って、13号土坑の未調査部分も視野に入れて3トレの北側を拡張する形でトレンチを設定し



1 見取り図

2 遺跡の位置 ●は中屋敷遺跡

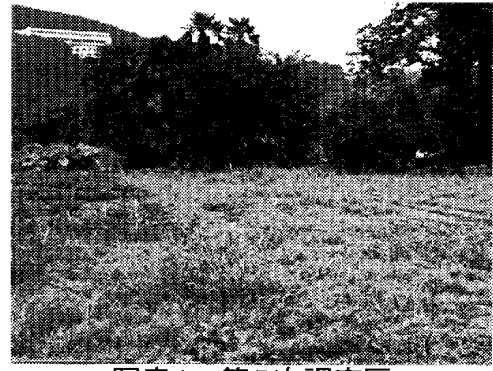
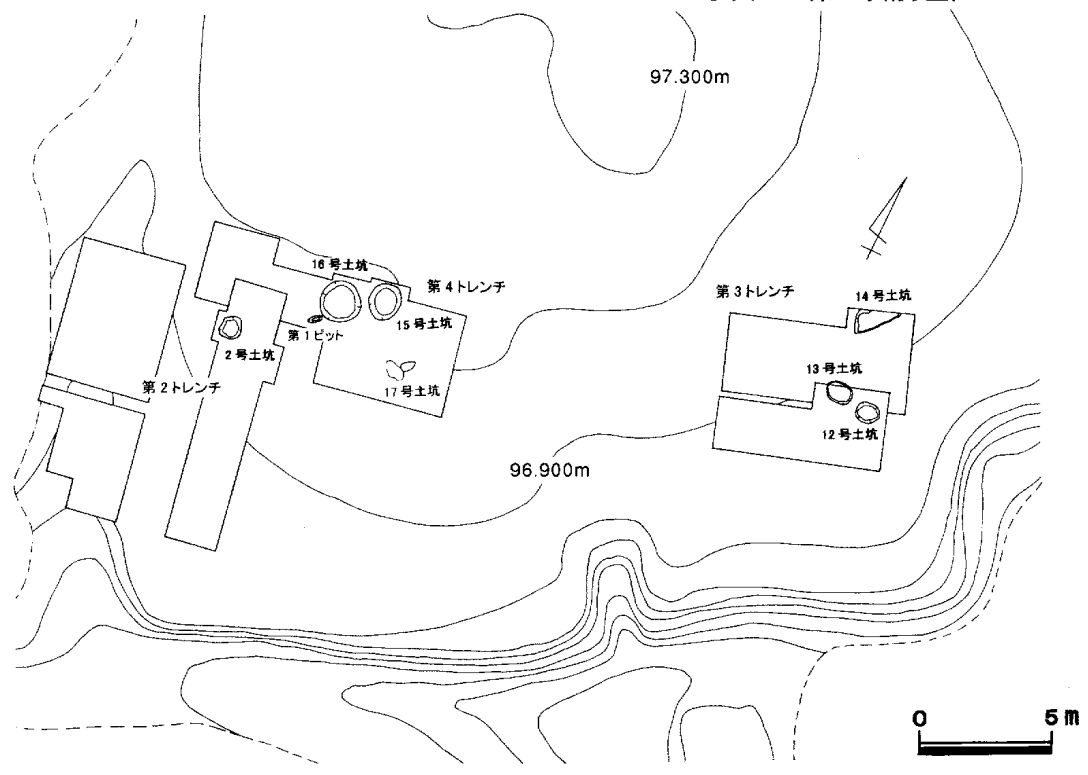


写真1 第5次調査区



3 第5次調査区

図1 遺跡の位置と調査区

た。F地区は、第2トレンチ（以下、2トレ）調査において第2次調査で2号土坑、第3次調査で11号土坑を検出したことと、2号土坑より西側及び11号土坑より南側はすでに遺構の存在しないことが確認されていることから、2トレの東側、北側の遺構検出を目的として、一部2トレに掛かる形で第4トレンチ（以下4トレ）を設定した。

3トレおよび4トレも当初は調査区内にベルトを設定し、土層を確認しながら掘り下げを行った。現地表面から約40センチの深さで、2層を検出した。さらにその層を除去し、ベルトも記録後除去し精査したところ、3トレで、13号土坑の未調査部分を検出した。さらに、トレンチの北壁付近で14号土坑を検出した。4トレでは15・16・17号土坑、1号ピットを検出した。17号土坑については時間の制約から確認のみに留めた。各調査区の詳細は後述する。

調査は8月2日から14日までの13日間で実施し、3班に分かれて3トレ、4トレ、測量を担当した。8月13日には3トレの調査を終了し、埋め戻しを行い、14日に4トレを埋め戻して調査を終了した。

調査中は、昭和女子大学の研修施設（東明学林）に合宿し、宿舎ではミーティング、土器洗いなどの整理作業も行った。また、期間中、台風のため作業を休止せざるを得なかったが、その際は卒業生を中心に遺物の勉強会なども実施した。本格的な整理は10月以降世田谷キャンパスにおいて発掘参加者および有志で実施した。

（小泉）

2 基本層序（図2）

層序は基本的に第3次調査の層序に準じる。ここでは、第5次調査で調査対象とした1～5層の特徴について記す。

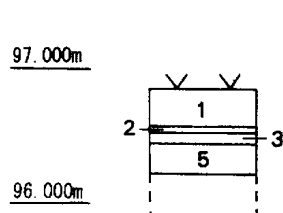


図2 土層柱状図
（第3トレンチ）

1層 **表土層**：約30～40cmの厚さで堆積している耕作土。径3mm以下の赤色スコリアを少量含む。径10mm以下の小礫を10～30%程度含み、下層になる程含有量が多い。しまり・粘性ともになし。現代～縄文時代の遺物を含む。

2層 **黒灰色スコリア層**（S-25=HO）：径1～3mm程度の黒青灰色スコリアを約10cmの厚さでブロック状に含む。スコリアは1707年の宝永年間に堆積した火山灰。しまり・粘性ともになし。攪乱されており、2次堆積によるものと思われる。遺物は含まない。

3層 **明褐色土層**：径5mm以下の橙色スコリア、径1mm以下の褐色・白色スコリアを少量含む。径10mm以下の小礫を少量含む。径5cm以下の炭化物を微量に含む。しまり・粘性あり。弥生時代初頭の遺物を含む。

4層 **黄褐色土層**：径5～10mmの黒色・橙色スコリア、径2～3mmの褐色スコリアをやや多く含む。パミスを多量に含む。径10mm以下の礫をやや多く含む。しまり・粘性あり。弥生時代初期の遺物を含む。

5層 **黒褐色スコリア層①**：径3mm以下の褐色・白色スコリア、径5mm程度の橙色スコリアをやや多く含む。径10mm程度の橙色スコリアを微量に含む。径3mm以下の小礫、パミスをやや多く含む。しまり・粘性共に3層よりあり。縄文時代前期末～中期初頭、中期後半の遺物を含む。13・14・15・16・17号土坑、第1ピット確認面。

3 調査区

(1) 第3トレンチ (図3)

第3トレンチ (以下、3トレ) の規模は東西7.0m、南北3.0mで、第4次調査で設定したトレンチに一部重なるように設定した。14号土坑がトレンチ北壁に接していたため、最終的にはd区のみ北へ0.30mトレンチを拡張し、21.48㎡のL字形のトレンチになった。

土層の堆積状況を観察するため、トレンチの中央に0.50m幅のベルトを設定し、セクション面の西側をc区、東側をd区とした。基本土層第2層の検出を目安に掘り下げていき、12・13号土坑が検出されている基本土層5層でプラン確認を行った。

また、c区で明確に確認されている5層が、d区では不明瞭であることからトレンチ東壁に2.0m×0.25mサブトレンチを設けた。堆積状況を確認したが、5層を検出することはできなかった。3トレでは、第4次調査によって東に向かって土層が緩やかに傾斜していることが確認されている。d区で5層検出ができなかったのも台地端のため、土層が傾斜している可能性が高い。

調査の結果、第4次調査でトレンチの壁にかかっていた13号土坑の掘り残し部分と、新たにトレンチ北壁にかかるように14号土坑が検出された。

13号土坑は第4次調査で発掘済みの部分と併せて東西0.91m、南北0.92m、深さ0.49mを測り、平面円形を呈することが明らかになった。第2次調査で遺物2点が出土しているが、今回は炭化材が上層から出土した他、遺物は検出されていない。

14号土坑はトレンチの北壁に接して検出された。確認されている部分で東西0.74m、南北1.04m、深さ0.29mを測り、さらに北へと広がっている。平面は不定形で、覆土は8層に分かれる。遺構に伴う遺物は無かった。

13号土坑の性格について、第4次調査の報告では土器の出土様相から埋葬施設である可能性を示している。今回、未発掘の部分が調査され土坑の全容が明らかになったが、出土遺物もなく遺構の性格を判断する資料は得られなかった。

14号土坑についても土坑からの遺物は出土せず、性格は不明である。

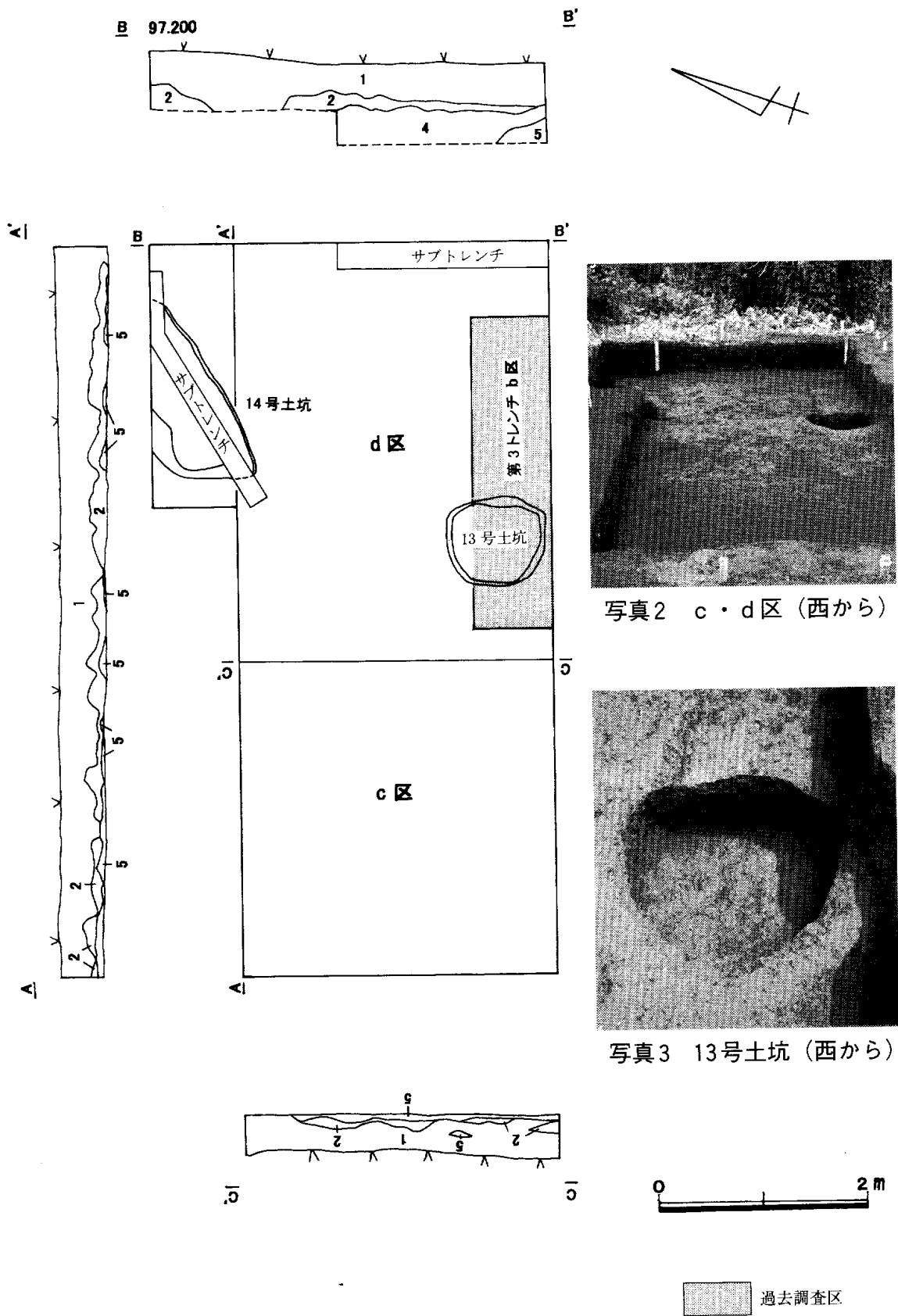


図3 第3トレンチ (S=1/80)

遺構外遺物の合計は土器20点、石器7点、陶磁器5点であった。

なお、今回の調査では、遺物包含層から多くの黒曜石製の碎片が出土した。(半田)

(2) 第4トレンチ (図4)

調査区のF地区に位置する。第2次調査での2号土坑の検出に伴い、同時期の遺構確認を目的に2トレの東側に一部重なるように、南北2.0m、東西10.0mに4トレを設定した。トレンチの中央には0.5mのベルトを設定し、西側をa区、東側をb区とした。

調査は、2号土坑検出確認面である基本層序第2層(HO)下で遺構の有無を確認することを心がけたが、結果として第5層上面で遺構を検出した。

a区では、第2・3次調査で行なった2トレの北東の角が、一部重なり、2トレとの位置関係が明瞭になったが、遺構は確認できなかった。

b区では、2号土坑検出確認面とほぼ同じ標高で、北側の壁にかかった2基の土坑を確認した。その1基がさらに中央に設定したベルトにかかっていたため、ベルトを取り払い遺構検出を行なった。その結果、土坑のプランを確認すると共に、ピット1基を検出した。それら計3基の遺構を東から15号土坑、16号土坑、第1ピットとした。この3基の遺構は東西方向に横に並ぶように隣接して位置している。

調査区周囲の遺構確認のため、a区の北側を南北1.0m、東西2.6m拡張した。b区は15号土坑と16号土坑のプランが北壁にかかったため、農作物を避け15号土坑の北側に南北0.5m、東西1.5m、16号土坑の北側に南北0.3m、東西1.4mの拡張をした。また、さらに遺構の存在が考えられるため、b区南側を南北2.0m、東西5.0m拡張し、精査したところ、17号土坑を検出した。最終的な4トレの調査範囲は33.67㎡となり、4トレで確認された遺構は、ピット1基、土坑3基となった。

15号土坑(図5上段)は、南北1.20m、東西1.40mの円形で深さは0.20mの土坑であった。遺物は土器19点、石器4点、多量の炭化材が出土した。覆土は4層確認でき、炭化材は土坑の中央にやや集中して上層から出土しているが、上層での径は小さく、下層になるほど径が大きくなる傾向が認められた。

16号土坑(図6)は、15号土坑の西側に隣接し、南北1.50m、東西1.30mの円形を呈し、深さは0.60mであった。覆土は8層確認され、土器111点、土製品1点、石器53点、多量の炭化材・骨片が出土した。炭化材は、15号土坑と同様上層では径が小さく、下層になるほど径が大きくなる傾向があった。

第1ピット(図5下段)は、北東方向にななめに細長く、縦0.3m、横0.6m、楕円形を呈している。遺物は出土していない。

17号土坑は確認のみにとどめ、調査は行なわなかった。

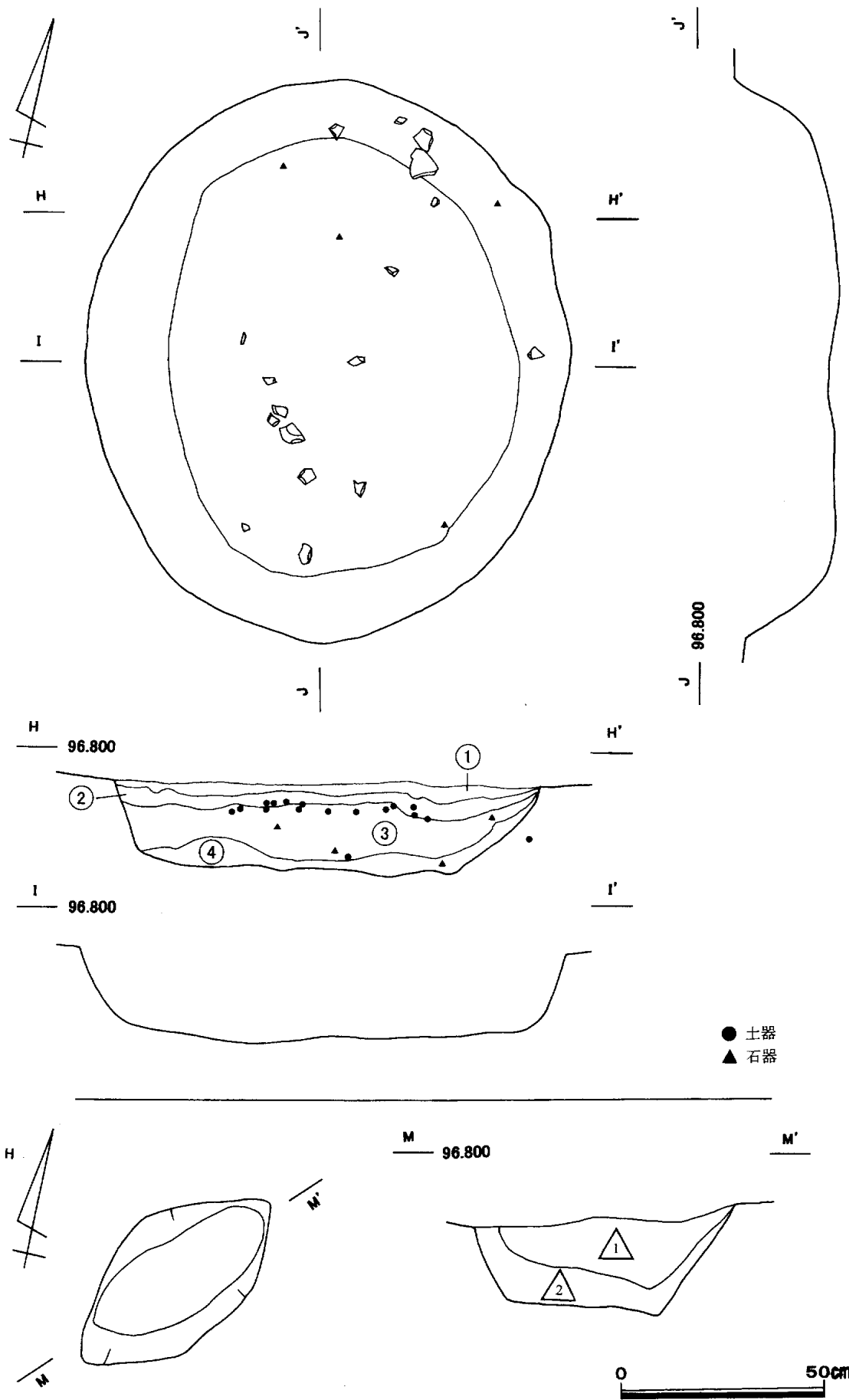


図5 15号土坑 (上) 第1ピット (下) (S=1/20)

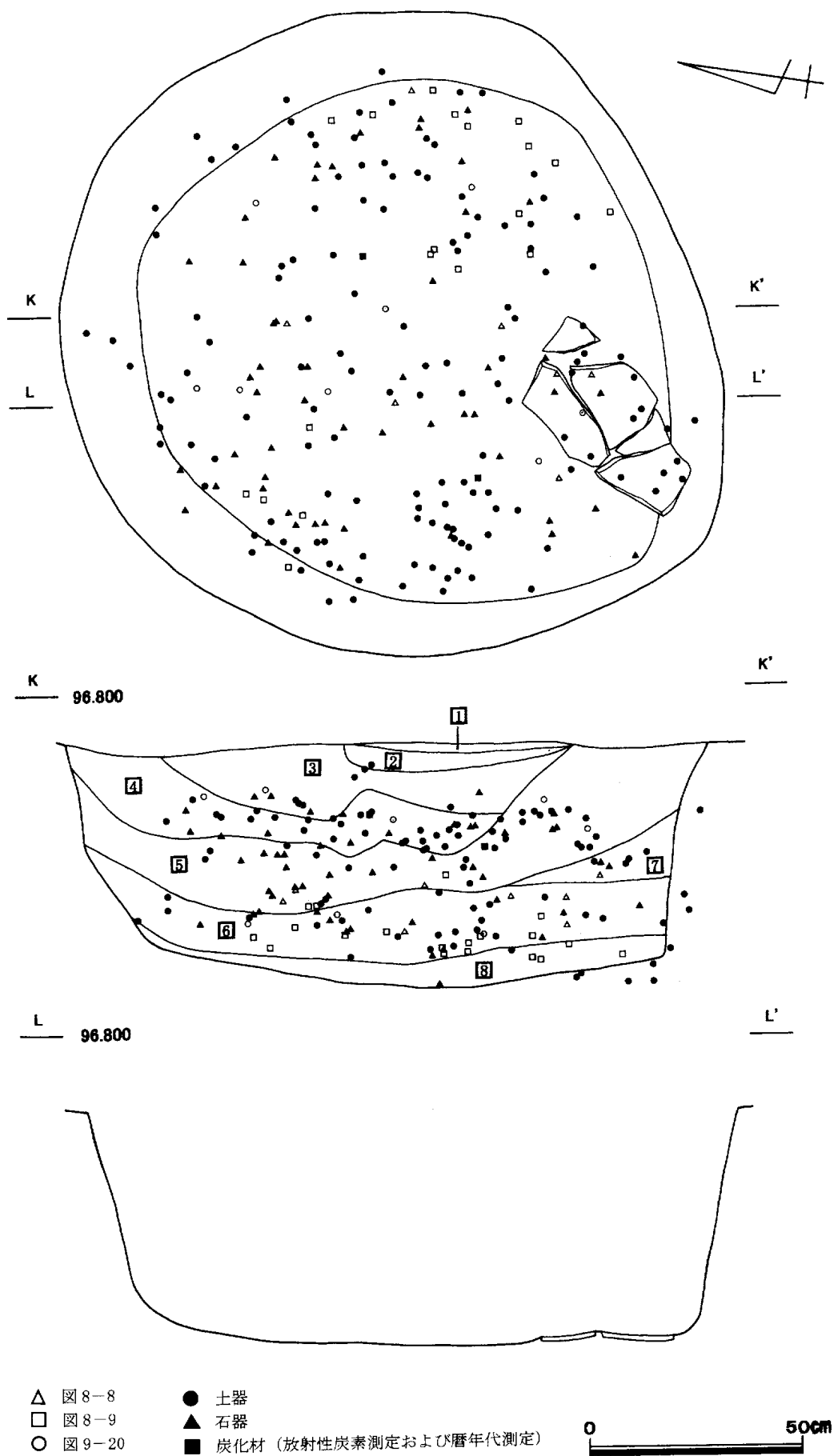


図6 16号土坑 (S=1/20)

次に、15・16号土坑、第1ピットの土層について記す。

15号土坑

- ①層（暗褐色土層） 径1mm以下の宝永スコリアを多量に含む。径1mm以下の白色粒子、径1～5mmの橙色スコリア、2～5mmの小礫を少量含む。しまり・粘性なし。
- ②層（暗褐色土層） 径1mm以下の白色粒子、径1～3mmの橙色スコリア、径1cm以下の褐色スコリアを少量含む。径3～5mmの炭化物を微量に含む。しまり・粘性なし。
- ③層（暗褐色土層） 径1～5mmの橙色スコリアを多量に含む。径1mm以下の黒色粒子を少量含む。径5～10mmの小礫をやや少量含む。しまり・粘性あり。
- ④層（黒褐色土層） 径1mm以下の白色粒子を微量に含む。径1～3mmの橙色スコリアを少量含む。径5mm以下の小礫を微量に含む。しまり・粘性あり。

16号土坑

- ①層 暗褐色土層 15号土坑①層と同じ。
- ②層 黄褐色土層 径1mm以下の白色粒子、径2～5mmの橙色スコリアをやや多く含む。径2～5mmの小礫を多く含む。しまり・粘性なし。非常にぼそぼそしている。
- ③層 黒褐色土層 径1mmの白色スコリアを多く含み、径2～5mmの橙色スコリアをやや多く含む。3～8mmの小礫を少量含む。径1～5mmの炭化材を少量含む。粘性なし。①・②層よりしまりあり。
- ④層 褐色土層 径1～3mmの橙色スコリア、径1～5mmの褐色スコリア、径3～5mmの小礫をやや少量含む。径5～10mmの炭化材を少量含む。しまり・粘性なし。
- ⑤層 黒褐色土層 径1mm以下の白色粒子をやや少量含む。径1～3mmの橙色スコリアをやや少量含む。径3mmの小礫を少量含む。しまり・粘性なし。
- ⑥層 黒褐色土層 径1mm以下の白色粒子をやや少量含む。径2～5mmの橙色スコリアを少量含む。径5～7mmの小礫を微量含む。径2～7mmの炭化材を含む。しまりあり、粘性なし。
- ⑦層 灰黄褐色土層 径1mm以下の白色粒子をやや少量含む。径1～3mmの橙色スコリア、径1～3mmの黒色スコリアを少量含む。径2～5mmの小礫を少量含む。しまり・粘性なし。
- ⑧層 暗褐色土層 径1mm以下の白色粒子をやや少量含む。径1ミリの橙色スコリアを少量含む。径7mmの小礫を微量に含む。しまり・粘性あり。

第1ピット

- △層 黄褐色土 径1mm以下の白色粒子、径3～5mmの橙色スコリア、径3～5mmの黒色スコリアをやや少量含む。径5～10mmの小礫を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
- △層 暗褐色土層 径1～5mmの白色粒子、径3～5mmの橙色スコリア、径3～5mmの黒色スコリア、黄色スコリアを少量含む。小礫を含む。

今回検出した15・16号土坑は、過去に検出した2号土坑、12号土坑、13号土坑と平面形態、出土土器が類似している。また15号土坑から出土した甕と同型式の破片が16号土坑から出土していることから、15号土坑と16号土坑がほぼ同時代の土坑である可能性が高い。(鈴木)

4 出土遺物

第5次調査の土坑出土遺物(土器、土製品、石器)について報告する。

(1) 土器(図7・8・9-1~19、写真5・6-1~19)

土器は15号土坑に伴う土器が22点、16号土坑に伴う土器が111点であった。下記の1、14は15号土坑出土土器、他は16号土坑出土土器である。土器片はすべて弥生時代前期に属する。以下に特徴的な資料を報告する。

- 1 甕形土器の口縁部片である。口唇部は横方向から丸棒状の工具で押捺が施され、緩やかに外反する。口縁下には横方向の茎束条痕が施される。内面ヘラナデ。胎土中に白色粒子、橙色粒子、金雲母、輝石を含む。黒色処理を施される。
- 2 甕形の口縁部破片である。緩やかに外反し、口唇部外面には横方向からの押捺を施す。胎土中に白色粒子、橙色粒子、石英、金雲母、繊維を含む。
- 3 甕形土器の口縁部片である。やや外反する口縁部に上方向から丸棒状の工具で押捺を施す。外面、内面ともにヘラナデ。胎土中に白色粒子、小礫、石英、金雲母を含む。
- 4 壺形土器の口縁部片である。口唇部ナデで口唇部下の2条の隆帯に指頭による押捺が施される。隆帯の下は横方向の荒い茎束条痕。内面は横方向の荒い茎束条痕が施される。胎土中に白色粒子、橙色粒子、石英、凝灰岩粒、金雲母を含む。断面黒色。
- 5 甕形土器の口縁から底部片。倒鐘状を呈し、口縁部は胴部の張りに対してあまり開かず、垂直気味に立ち上がる。口縁部に山状の突起を有する。外面胴上部は斜方向、胴下部は縦方向に荒い茎束条痕が施される。底部付近は横方向のヘラケズリ。胴上部、胴下部、底部付近の順に施文される。内面はヘラケズリを胴上部に横方向に施した後、胴下部に縦方向に施す。胎土は白色粒子、橙色粒子、黒色粒子、凝灰岩粒を含む。石英、金雲母は含まれない。断面黒色で非常に焼成がよい。16号土坑底部から出土した。推定器高約50~60cm。
- 6 鉢の口縁部から胴部片である。口縁部に山状の突起を4単位有する。口縁部ヨコナデ、胴部は内外面ともにミガキ。外面には沈線が施され黒色処理後全面に赤彩を施す。胎土中に白色粒子、橙色粒子、黒色粒子、石英、輝石、黒雲母を含む。

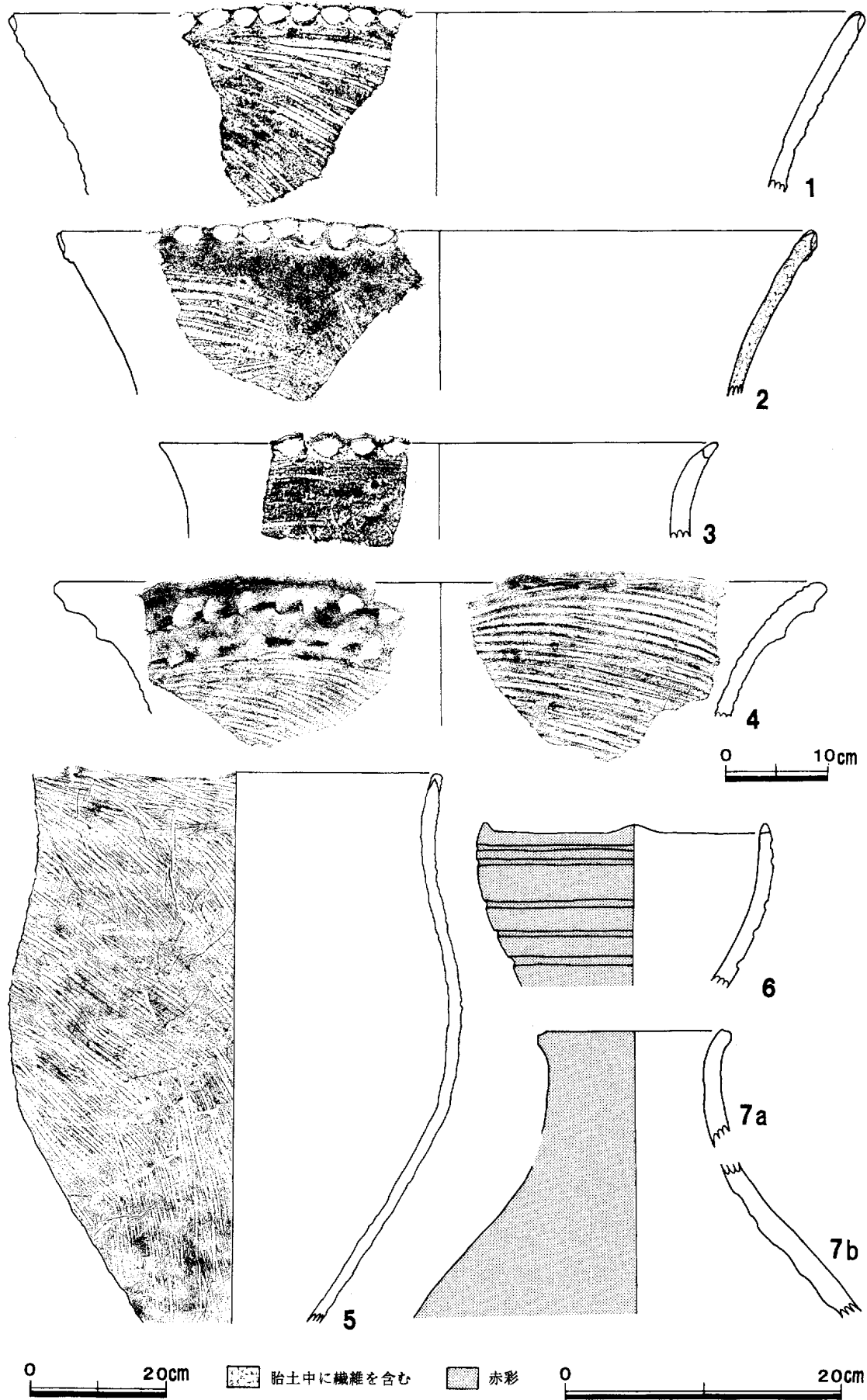


図7 出土遺物1 (1~3・6・7S=1/3、4S=1/4、5S=1/6)

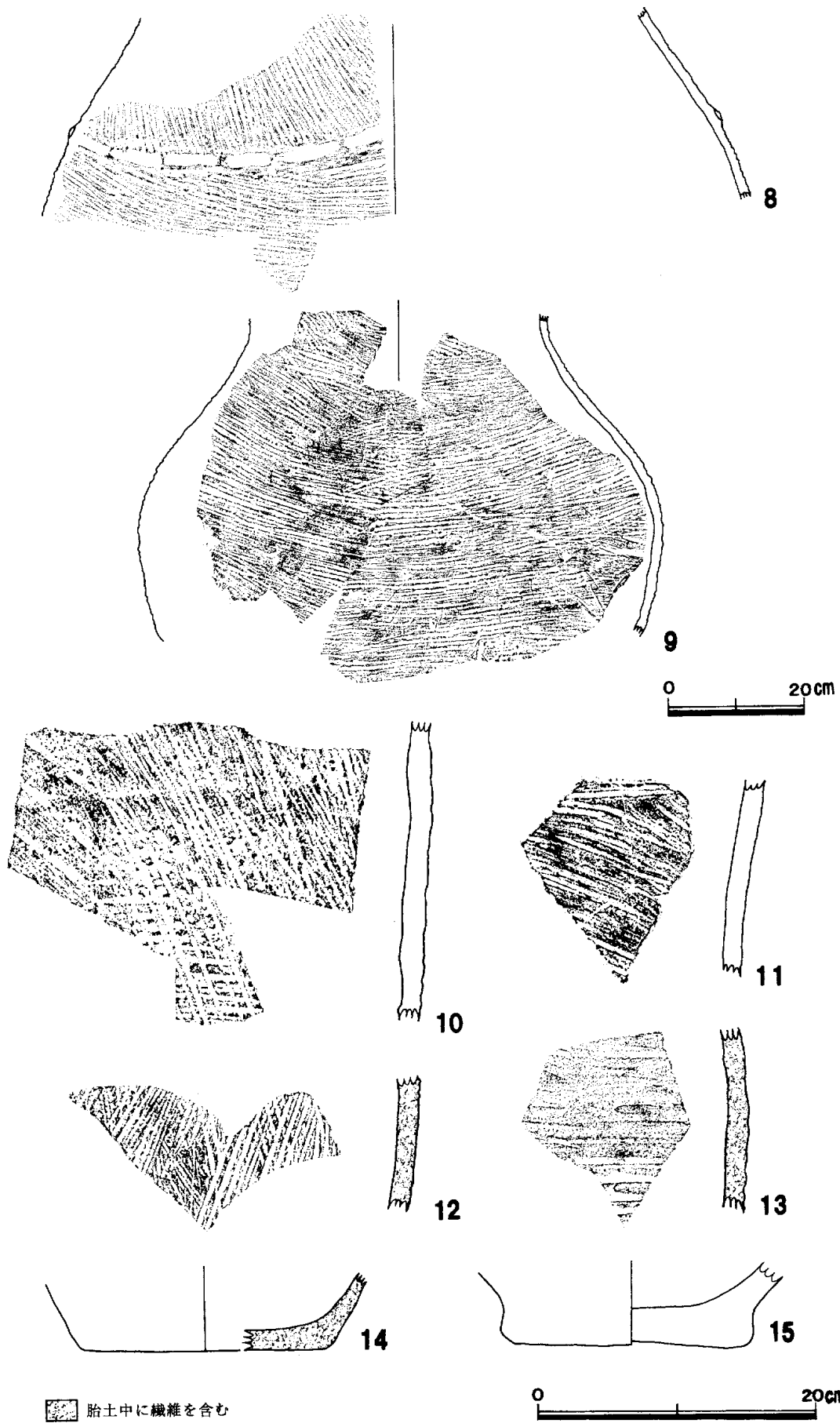


図8 出土遺物2 (8・9S=1/6、10~15S=1/3)

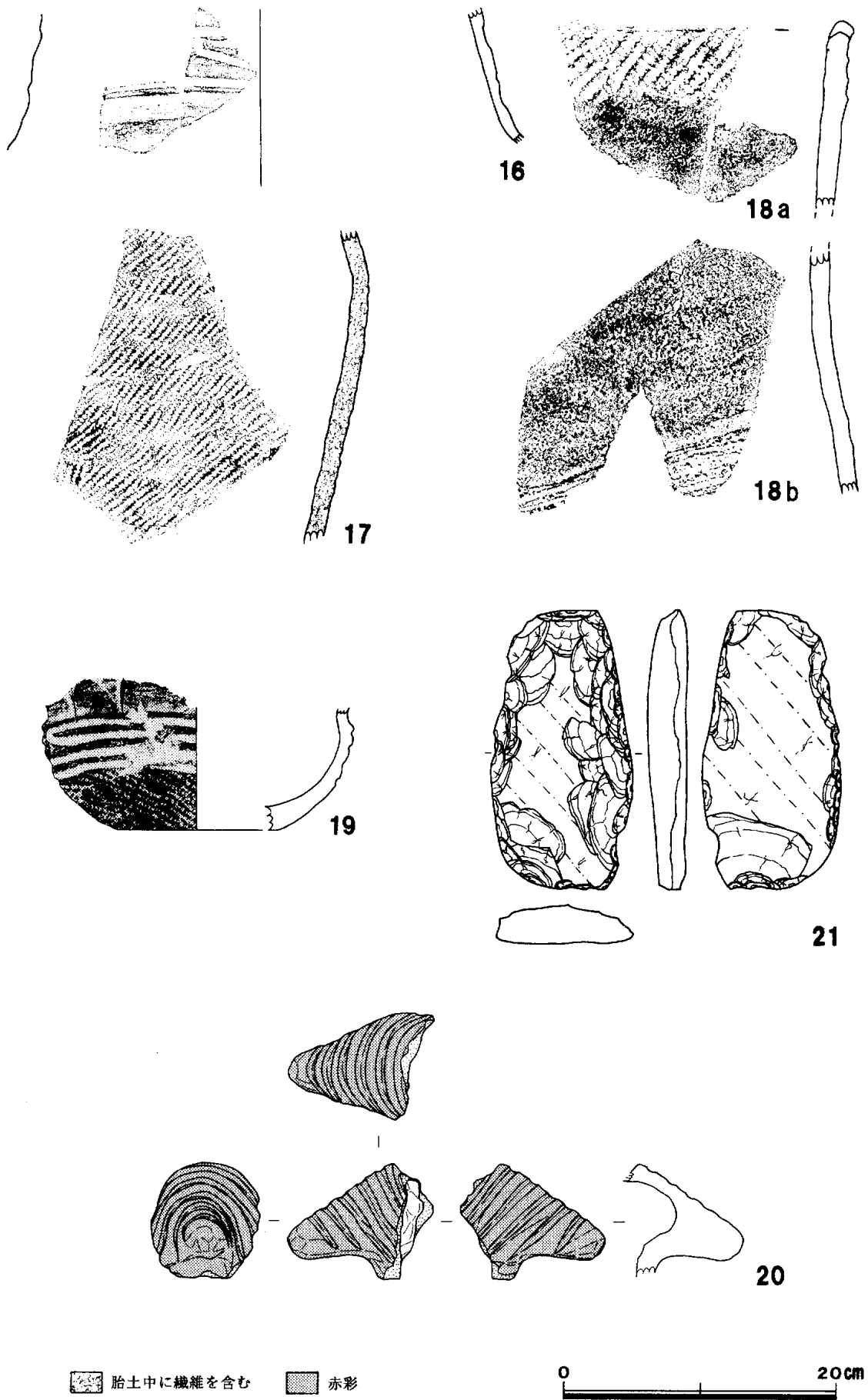


図9 出土遺物3 (16~21S=1/3)

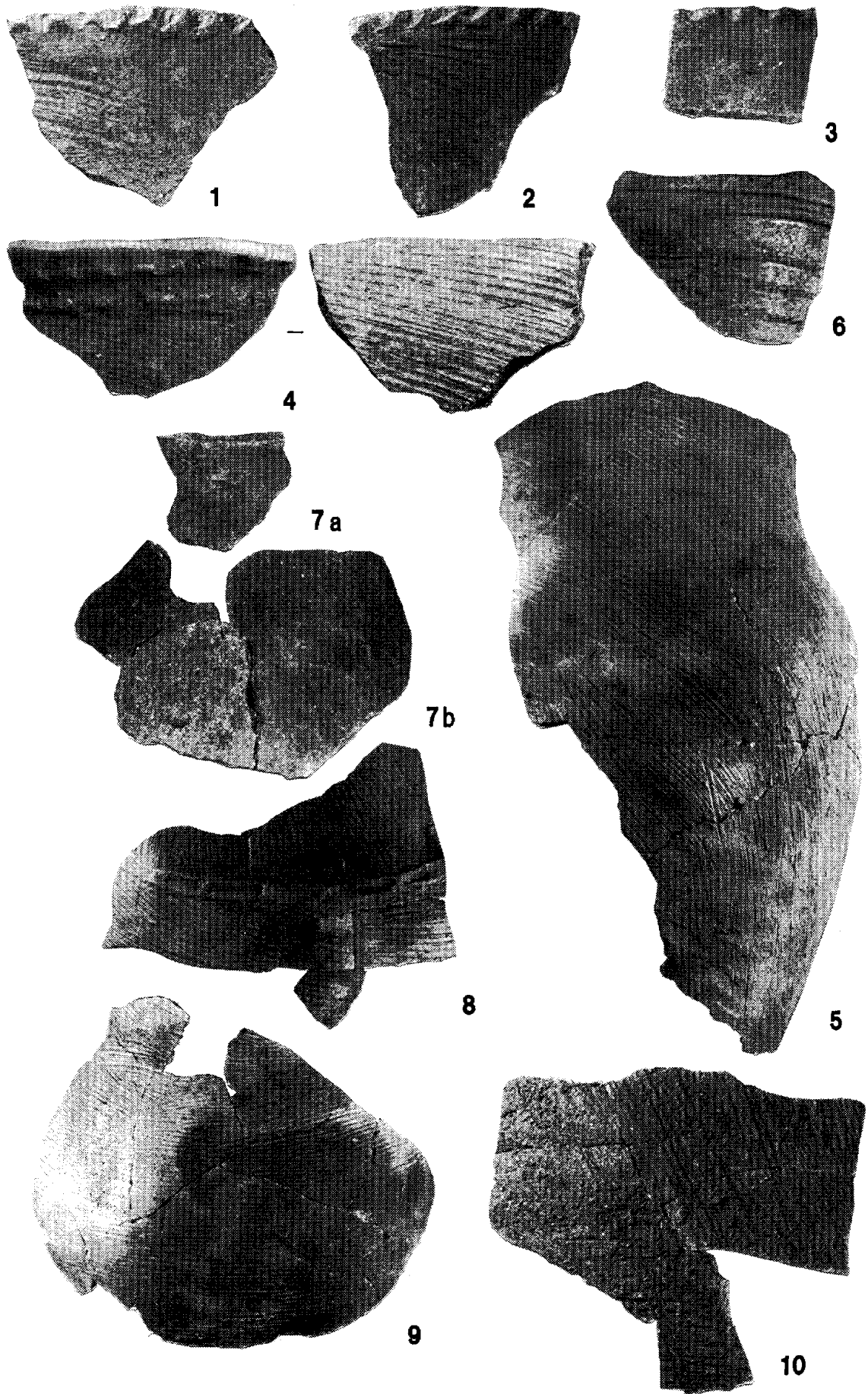


写真5 出土遺物1 (1~3・6~10S=1/3、4S=1/4、5・8・9S=1/6)

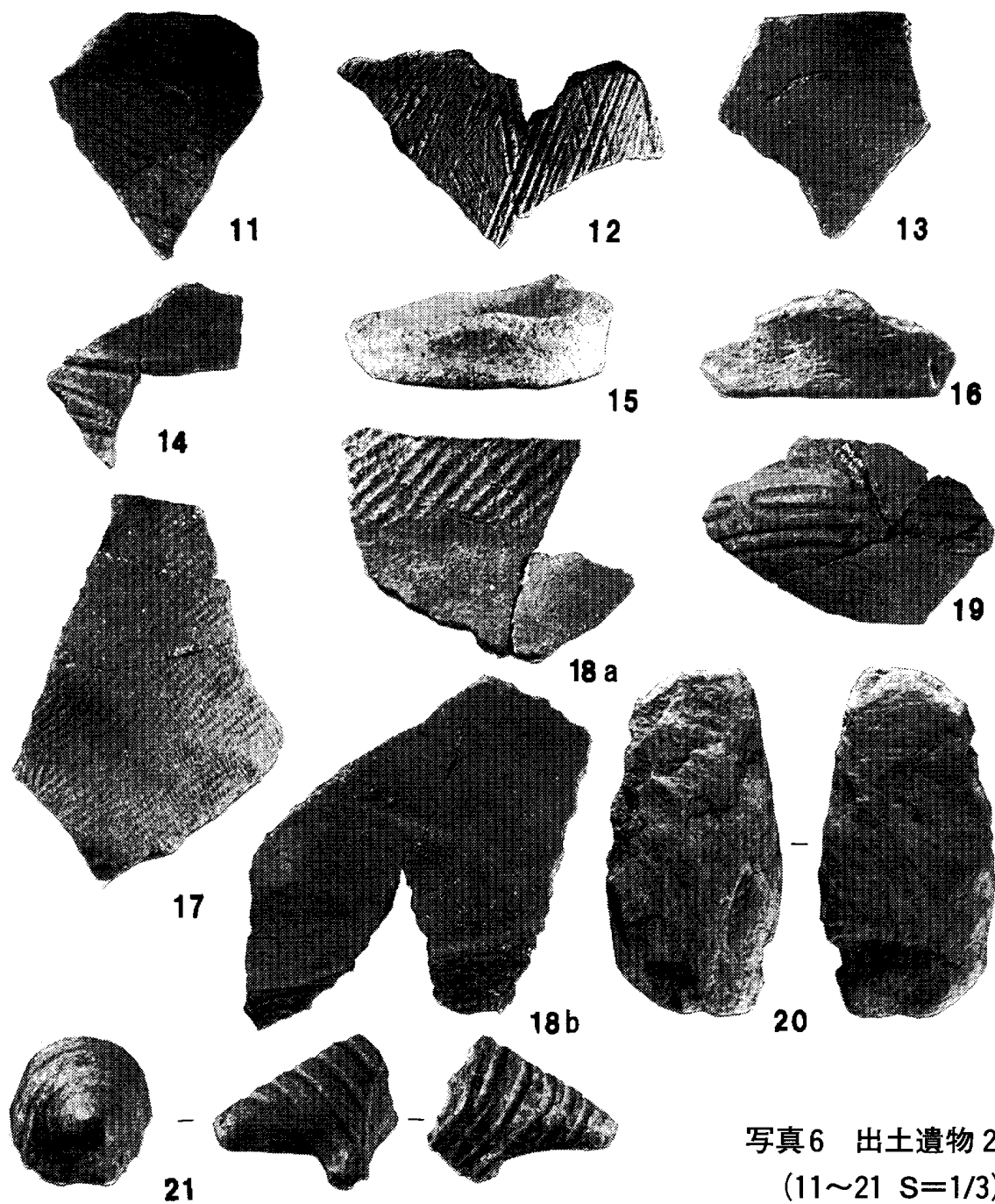


写真6 出土遺物2
(11~21 S=1/3)

表1 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-2480 (AMS)	土器附着物 NY5・4Tr b 16P	-25.4	2,405 \pm 30	cal BC 410	cal BC 515 - 460 (59.8%) cal BC 450 - 440 (14.2%) cal BC 430 - 420 (10.8%) cal BC 415 - 405 (15.2%)
PLD-2481 (AMS)	炭化材 NY5・4Tr 16D No.531	-25.2	2,410 \pm 30	cal BC 410	cal BC 515 - 460 (60.0%) cal BC 455 - 435 (15.1%) cal BC 430 - 405 (24.9%)
PLD-2482 (AMS)	炭化材 NY5・4Tr 16D No.533	-28.3	2,365 \pm 30	cal BC 400	cal BC 480 - 465 (18.7%) cal BC 415 - 390 (73.0%)

- 7a・b 壺形土器の口縁部、肩部片である。口縁部ヘラナデで、外面は頸部ヨコナデの後、胴部から頸部に向かって縦方向にヘラケズリされ、赤彩が施される。内面は横方向のヘラナデで輪積み痕が顕著に見られる。胎土中に白色粒子、小礫、石英、金雲母、凝灰岩粒を含む。
- 8 長胴壺の肩部から胴部片である。肩部に1条の突帯を巡らし、指による横長の押捺を施す。突帯上部は縦方向、下部は横方向に粗く深い茎束条痕を施文する。上部条痕は突帯貼り付け後に施文される。胎土中に、白色粒子、小礫、金雲母、凝灰岩粒を含む。黒雲母を多量に含む。
- 9 壺形土器の頸部から胴部片である。胴部は横方向の粗い茎束条痕、頸部は斜方向の条痕を施文する。内面はナデ。胎土中に、白色粒子、黒色粒子、小礫を含む。石英、金雲母、凝灰岩粒を多く含む。
- 10 甕形土器の胴部片である。外面は横方向の荒い条痕の跡に斜方向の条痕が施文される。内面は縦方向と横方向にヘラナデ。やや厚手。胎土は粗く、白色粒子を含み、小礫をやや多く、黒雲母を多く含む。金雲母を微量に含み、石英、輝石、凝灰岩粒を含む。
- 11 甕形土器の胴部片である。右下がり斜方向の浅い茎束条痕を施文した後、破片上部に横方向の条痕を施す。内面はヘラナデ、輪積み痕がみられる。胎土中は、白色粒子、小礫を多く含む。石英と黒雲母を含み、輝石を多く、繊維を含む。15、16号土坑から出土した土器片が接合している。黒色処理を施される。
- 12 甕形土器の胴部片である。外面は横方向の浅く細い茎束条痕が施された後に縦方向の荒い条痕が施れる。内面はヘラケズリ。薄手。胎土中は、白色粒子と小礫をやや多く含み、石英を含み、金雲母、繊維を多く含む。他に同一個体と思われるものが2破片認められる。
- 13 甕形土器の胴部片である。外面は横方向に板状の幅広で薄い条痕が施文される。板状の条痕は第5次調査ではこの1点のみの出土である。内面はヘラケズリ、輪積み痕あり。胎土は粗く、白色粒子を含む。小礫、石英を少量、凝灰岩粒を含む。
- 14 甕形土器の底部片である。内面、外面、底はともにヘラケズリ。胎土中に、白色粒子、橙色粒子、小礫を多く含む。比較的大きい石英を多く含む。凝灰岩粒を含む。
- 15 甕形土器の底部破片である。内面、外面ともにはヘラナデ。底にヘラケズリ。胎土は粗く、白色粒子、大粒の石英、小礫、金雲母を多量に含む。
- 16 器種不明の胴部片である。外面はミガキ。沈線による変形工字文が施され、一部赤彩が残存する。内面はヘラナデ。薄手である。胎土中に白色粒子、橙色粒子、石英を含む。黒色処理を施される。
- 17 器種不明の胴部片である。外面は細かいLRの縄文が施される。内面はヘラナ

デ。輪積み痕が見られる。胎土中に白色粒子、橙色粒子、黒色粒子、小礫、輝石、金雲母を含む。

18a・b 甕形土器の口縁部、胴部片である。口縁部に山状の突起を有し、口唇部は平坦でナデが施される。口縁部は折り返しのない帯状文で、太いLR縄文を施す。胴部に荒い茎束条痕が施される。内面はヘラケズリ。胎土中に白色粒子、小礫、石英、凝灰岩粒を含む。

19 小型壺の頸部から底部付近である。外面は頸部はミガキ、胴上部は沈線による変形工字文の表現が崩れたもの、胴下部は細かなRL縄文が施される。一部赤彩が残存している。内面はナデの後ミガキ。胎土は比較的精緻で、白色粒子、橙色粒子、石英、凝灰岩粒、金雲母を少量含む。黒色処理を施される。

(鈴木・半田)

(2) 土製品 (図9-20、写真6-20)

土製品はすべて15号土坑、16号土坑から出土した。いずれも小破片であるが、同一個体と見られる破片も存在する。そのうち図化出来た1点について報告する。

20 土偶の腕部と想定される土製品片であるが、左腕か右腕かは不明である。残存部からみて体部は中空を呈する。前面から腕上部を通り、背面にかけて6条の沈線によって施文されており、一部赤彩が残存している。内面には指頭による圧痕がみとめられ、外面はミガキによって丁寧に調整されている。胎土中に、白色粒子、赤色粒子、金雲母を含み、堅緻である。焼成は良好で、内面は黒褐色、外面は黒色を呈する。残存高4.2cm、残存幅5.3cm、厚さ3.9cm。16号土坑6層出土。

(石井)

(3) 石器 (図9-21、写真6-21)

石器は、計64点出土した(表2)。特に16号土坑に集中している(表3)。さらに、表化した資料以外にも土坑および包含層で黒曜石製の剥片や調整剥片が多く出土していることから、石器の製作跡の可能性が考えられるが、この点については本報告で考察を行うこととする。ここでは、出土石器のうち特徴的な器種について報告する。

21 風化が著しく、一部剥落が認められるが、ほぼ完形の打製石斧である。片理が極めて発達している結晶片岩を用いており、節理で割れた扁平な礫を素材としている。側縁に対して垂直な方向から平行剥離を行うことによって、外形を短冊形に成形している。法量は、長さ10.1cm、幅5.2cm、厚さ1.5cm、重量102.3g。16号土坑6層出土。

(早勢)

表2 第5次調査石器組成表

	石鏃	打製石斧	剥片	石核	調整剥片	砕片	計
黒曜石	1		19	5	16	13	54
チャート	1						1
結晶片岩		1					1
ホルンフェルス			1			1	2
凝灰岩			2			1	3
砂岩						3	3
計	2	1	22	5	16	18	64

表3 出土黒曜石組成表

	石鏃	剥片	石核	調整剥片	砕片	計
15号土坑		2			2	4
16号土坑		15	4	16	9	44
遺構外	1	2	1		2	6
計	1	19	5	16	13	54

5 調査の成果と今後の課題

第5次調査の第一の成果は、15・16号土坑の検出である。このことにより、G・F地区で計7基の土坑が存在することが明らかになった(図1-3)。さらに、土坑に伴ってまとまった土器資料を得られたことも大きな成果であった。土器資料の位置づけについては、まだ検討段階であるが、16号土坑の土器は、大きく分けて大洞的な精製土器と粗製ないし半精製土器の2タイプがある。精製土器は浮線網状文の影響を受けてはいるものの、帯状文の粘土の折り返しが省略されていたり(土器18)、沈線の多用(土器19)が見られるなど新しい要素が見られる。粗製、半精製土器は条痕文土器であるが、条痕は茎束状工具を用いたと思われるものが大半を占め、胴部下半は縦、上半は斜めもしくは横方向に施される。口縁部にレンズ状の押捺を施すものもあるが、押捺は横方向から施される傾向をもち、その間隔が細かい。壺の肩に突帯を巡らし、突帯の上下で調整を変えている点(土器8)も特徴である。このような土器の諸要素は、東海地方を中心とする条痕文土器の影響を受けつつ東北地方の浮線網状文の影響を受けて、在地で生産された可能性を示唆している。土器の胎土に凝灰岩が目立つものと金雲母を多く含むタイプがあることから、これらの違いについても検討が必要であると考えられる。また、これらの土器の時期であるが、水神平併行期とし、弥生時代前期後半の時期を想定している。土坑の性格については、16号土坑から骨が出土したことから再葬墓もしくは墓壙の可能性を考えていたが、骨の鑑定ⁱⁱⁱから、人骨ではないとの見解を得たことによって、貯蔵穴もしくは廃棄坑の可能性を視野に入れる必要が出てきた。貯蔵穴もしくは廃棄坑であるとすると、近くに集落が存在する可能性も高く、今後さらに範囲を広げた遺跡の概要把握が必要となろう。その一方で、土製品の中に土偶の破片が存在し、土偶形容器の可能性も考えられることから、再葬に関わる遺構であることも完全に否定することは出来ない。黒曜石のフレーク、チップが大量に出土することも検討課題の一つである。1934年に発見された土偶形容器は弥生時代中期の再葬墓に関わるとすると、中期の遺構の立地と弥生時代前期～中期初頭の遺構の立地の違いについても検討を要する。今後、土坑群の性格を明らかにするためにも、さらなる土坑の広がり

認と資料の増加が望まれるところである。

また、今回の調査ではわずかな点数ではあるが、炭素14年代測定、第1次～5次調査出土黒曜石7点の産地推定を行った。年代測定では、16号土坑出土土器（土器9）が紀元前515～460年の分析結果を得た^{iv}（表3、測定番号PLD-2480）。同一土坑出土の炭化材にも同様の年代値を示すものが存在した。黒曜石の産地推定は、概報で図化した資料のみを対象としたため、全体の傾向を示すものではないが、神津島恩地島群、諏訪星ヶ台群の分析結果を得た^v。その他の出土品には、肉眼観察で箱根産のものも存在する可能性を考えている。今回の分析によって少なくとも二箇所以上の産地から持ち込まれたことが明らかになったと言える。今後は出土品の詳細な時期の検証と共に、分析資料を増やし、産地と時期との関係を見ることも必要であろう。炭化材による樹種同定では、ケヤキ、カエデ属、イヌシデ節、アカガシ亜属など複数の樹種が存在した^{vi}。第3次調査12号土坑の炭化材をもとに行った同定結果^{vii}とは異なる樹種が検出されていることも今後の検討課題の1つである。いずれの分析も限られた点数で実施したに過ぎないが、当該期のデータの一つとして、検討材料を提示したと考えている。今後、比較データが増加することが望まれる。

おわりに

調査にあたってご理解とご配慮をいただいた、地権者の小宮操氏並びにご家族の皆様がこの場を借りてお礼申し上げたい。また、大学院生を中心として自主的に調査整理に取り組んだ学生の熱意と根気に拍手を送ると共に、仕事の都合をつけて駆けつけてくれた卒業生にも感謝したい。暑い現場に足を運びご指導下さった方々、整理作業の折にご指導下さった方々にも深謝したい。今後も関係諸氏のご指導、ご教示を賜われれば幸いである。

発掘調査および出土品の整理にあたり、次の諸氏・諸機関のご協力、ご指導を賜った。（敬称略）

秋本雅彦、天野賢一、飯田寧、今井明子、大井町教育委員会、倉石広太、財団法人かながわ考古学財団、佐々木由香、昭和女子大学学園本部・東明学林・事務局・生活環境学科、鈴木正博、多崎美沙、谷口肇、パレオ・ラボ、藤井恵、藤田尚、館まりこ

なお、整理作業は小池利春・磯部裕史（國學院大學1年）の参加を得た。また、整理作業は、全般にわたり江川真澄によるところが大きかったことを記す。

-
- i 第5次中屋敷遺跡調査団 顧問：櫻井清彦（昭和女子大学特任教授）、山本博也（同大学院生活機構教授研究科）、団長：山本暉久（同教授）、調査指導：菊池誠一（同歴史文化学科助教授）・御堂島正（同非常勤講師）、調査主任：小泉玲子（同助教授）、調査員：石井寛子・領家玲美・鈴木由貴子・半田素子（同生活機構研究科修士課程）、補助調査員：飯塚智子・江川真澄・大沼香織・早勢加菜（同歴史文化学科4年）、加科貴絵・川島明希子・北村智子・布施沙織（同3年）、岡野佐知子・竹村朋子・中野弥生・吉田泰子（同2年）、中川玲子（同1年）
 - ii 舘まりこ・佐々木由香他2001「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第2次調査報告（2000年度）」『昭和女子大学文化史研究』5号、昭和女子大学文化史学会
今井明子・藤井恵他2002「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第3次調査報告（2001年度）」『昭和女子大学文化史研究』6号、昭和女子大学文化史学会
石井寛子・領家玲美他2003「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第4次調査報告（2002年度）」『昭和女子大学文化史研究』7号、昭和女子大学文化史学会
以下、第2～4次調査の成果は、上記調査報告を参照している。
 - iii 藤田尚の教示を受けた。「積極的に人骨と認められる資料は見当たらない」とのことであった。
 - iv 山形秀樹2004『中屋敷遺跡発掘に伴う自然科学分析』（パレオ・ラボ）
 - v 小村美代子2003『中屋敷遺跡出土黒曜石の原産地推定』（パレオ・ラボ）
 - vi 植田弥生（パレオ・ラボ）による同定。
 - vii 佐々木由香2003「神奈川県大井町中屋敷遺跡出土の炭化材の樹種同定」『昭和女子大学文化史研究』7号